

□ オーケストラ

岩野 裕一

2021年のオーケストラ界は、前年に引き続き、新型コロナウイルス感染症への対応に明け暮れた1年間であった。1月初旬から9月末にかけて緊急事態宣言が断続的に3回にわたって発令されたうえに、外国人に対する入国規制ルールの運用が目まぐるしく変わったため、公演中止の回数こそ前年より減少したものの、出演者や曲目の変更が相次いだ。

加えて、秋には変種のおミクロン株が発見されたため、11月30日以降、外国人の新規入国が停止となった。その直前に入国していた3名の外国人指揮者（ジョン・アクセルロッド、ガエターノ・デスピノーザ、ユベール・スダーン）が、滞在を延長して年末の「第9」を筆頭に、多数の公演を指揮して日本の楽壇を支えたことは特筆に値しよう。

いっぽう日本人指揮者も、海外アーティストの不在を補って余りある存在感を示した。2021年に傘寿を迎えた秋山和慶の驚異的な活躍を筆頭に、長老格の飯守泰次郎は46年ぶりに読売日響の定期公演を指揮して感動的な名演を聴かせたほか、70代の井上道義、尾高忠明、60代の広上淳一、高関健、50代の沼尻竜典、阪哲朗、下野竜也らは大車輪の活躍を示した。

また、古楽出身ながら引く手あまたの鈴木雅明、鈴木秀美、鈴木優人の3人は、客演先の楽団の音を確実に変える成果を挙げた。さらには、若手のライジングスター原田慶太楼、中堅として着実に成果を挙げつつある角田鋼亮など、ここに名前を挙げられなかった指揮者を含めて、日本人指揮者の層の厚さは、コロナ禍にあってひとつの光明と言えるだろう。

各団体の主な動きを概観すると、**札幌交響楽団**は首席指揮者マティアス・バーメルトと9月の創立60周年記念定期をブルックナーの「7番」で祝った。日本の現代作品の紹介に積極的な**仙台フィル**は、没後25周年を迎えた武満徹の代表作を、2021年1月から3月の定期で3人の指揮者が1曲ずつ取り上げた。

群馬交響楽団は、文化による戦後復興を目指し誕生した地方オーケストラの草分けとして第43回サントリー地域文化賞を受賞。11月に群馬県知事と高崎市長が発表した「改革プラン」も注目される。**NHK交響楽団**は2020年9月から21年6月までの定期公演を中止し、日本人指揮者を中心とした特別演奏会に切り替える異例の態勢をとった。定期公演が復活した後の10月、94歳で来日を果たした名誉指揮者ヘルベルト・ブロムシュテットの澁刻たる演奏は、聴衆に大きな勇気を与えた。

常任指揮者高関健のもと、演奏能力が飛躍的に向上している**東京シティ・フィル**だが、桂冠名誉指揮者・飯守泰次郎の傘寿を祝うワグナーの「ニーベルングの指輪」ハイライトは、海外勢の歌手を奇跡的に迎えての歴史的な名演となった（5月）。**東京交響楽団**は、5月に2年ぶりの来日を果たしたジョナサン・ノットと2回の特別演奏会を行い、舞台上から「I'm home!」のメッセージを掲げたノットに客席から熱い拍手が贈られた。

東京都交響楽団は、東京2020オリンピック競技大会の開会式に音楽監督大野和士と共に登場。年末のNHK紅白歌合戦にも初出演して10月に逝去した作曲家すぎやまこういちの「ドラゴンクエスト」の音楽を演奏するなど、その存在を広く社会にア

ピールした。**東京フィルハーモニー交響楽団**は、新国立劇場の公演中止や依頼公演のキャンセルで経営的に大きな打撃を受けたが、9月定期でのミュージック・アドヴァイザー、チョン・ミョンフンとのブラームス・チクルスで気を吐いた。

日本フィルが、2020年12月末に2億円の資本性劣後ローンで商工中金から受けて財政基盤強化を図ったのは、楽団経営上画期的。アジアの新星カーチュン・ウォンが9月から2年間の任期で首席客演指揮者に就任している。**読売日本交響楽団**は、常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレが2月の来日時に代役で二期会「タンホイザー」を指揮して成果を挙げた。8月の公演で実質的な東京デビューを果たした独ドルトムント歌劇場の第一指揮者小林資典や、11月定期に客演したマリオ・ヴェンツァーゴのブルックナーも印象に残る。

オーケストラ・アンサンブル金沢は、7月によく来日を果たした芸術監督マルク・ミンコフスキと、ペートーヴェン・チクルスを変則的な形で敢行、9曲中6曲の演奏を終えている。4月に念願の公益財団法人化を果たした**セントラル愛知交響楽団**は、常任指揮者の角田鋼亮が着実に楽団の質を高めており、12月のハイドン・シリーズでの「交響曲第95番」は両者の絆を感じさせる名演だった。

名古屋では**愛知室内オーケストラ**が2021年度から運営体制を強化して、活発な演奏活動を行っているが、対する老舗の**名古屋フィルハーモニー交響楽団**は、アマチュアからプロ指揮者に転じた若手の注目株・坂入健司郎を8月の東京公演に抜擢して、東京の音楽関係者やファンの大きな話題を呼んだ。

大阪フィルハーモニー交響楽団、**関西フィルハーモニー管弦楽団**、**日本センチュリー交響楽団**、**大阪交響楽団**の大阪「4オケ」は、4月に恒例となった合同公演を行い、5月には大阪府にイベント制限緩和を申し入れるなど、協力して盛り上げる姿勢を貫いている。関西フィルは4月から大阪府門真市に練習場を移転して提携をスタート、日本センチュリーは4月から人気作曲家の久石譲が首席客演指揮者に就任している。

広島交響楽団は、無観客で内容変更を余儀なくされた昨年の400回記念定期に代わり、4月の410回定期に秋山終身名誉指揮者、下野音楽総監督が揃い踏みしてレスピーギの「ローマ三部作」を披露。**九州交響楽団**は、400回記念定期を小泉和裕音楽監督のブラームス「交響曲第2番・第3番」で祝った。

人事組織面では、4月に静岡響と浜松フィルが合併して「**富士山静岡交響楽団**」と改称、**東京ニューシティ管弦楽団**は翌22年4月から音楽監督に飯森範親を擁し、「パシフィック・フィルハーモニア東京」として旗揚げすることを9月に発表した。**神戸市室内管弦楽団**は4月から音楽監督に鈴木秀美を迎え、ユニークな存在を目指す。

オーケストラ関連の大型イベントとしては、ミューザ川崎の「フェスタサマーミューザKAWASAKI2021」が無事に開催されたほか、「セイジ・オザワ松本フェスティバル」はオーケストラ・コンサートの一部のみ無観客配信で開催されたが、シャルル・デュトワが圧巻の指揮で同席した小澤征爾を感激させた。日本オーケストラ連盟主催の「オーケストラキャラバン」は、文化庁の「大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業」の一環として、全国37会場で47公演を開催。従来は外来楽団中心だった「NHK音楽祭」も、全国5都市のオーケストラ所在地で地元楽団を起用しての開催となった。

外来組は、ウィーン・フィルが昨年に続いて来日を果たし、リッカルド・ムーティ指揮でファンの渇きを癒したほか、9月にはプラハ・フィルハーモニア管が全国で公演している。